
Reason of Life

亜野 燈斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R e a s o n o f L i f e

【Nコード】

N 8 5 6 8 B

【作者名】

亜野 燈斗

【あらすじ】

ある日突然現れた死神と名乗る青年、夜鬼が主人公、中川八重にした質問は「あなたは何故、生きているのですか？」だった。その質問に夜鬼が納得する答えを出さなければ魂を取られることになった八重の「生きている理由」探しの物語。

第1話（前書き）

この物語はフィクションです。

第1話

「君は何故生きているの？」

そう突然聞かれて、すぐに答えを思い付く人間は少ないだろう。実際、私もすぐに答えることはできない。いや、今の私はいくら考えても、その質問の答えを見つけないことはできないだろう。いままで17年間生きてきたのだが正直、自分が何故生きているのかなんて考えもしなかったし、誰も教えてくれなかった。大人達から教わったことと言えば、将来何に使うのかもわからない記号や歴史、それと大人のズルさや汚さ。まあ、中には本当に私達、子供…17つていう歳を子供って言えるのか言えないのかは知らないけど、子供っていうことにして、子供のことを本当に理解してくれている大人もいたけどそれはほんの一握り程度の人だった。とにかく、私に生きている理由を教えてくれた人はいなかった。もし、私が人間以外の動物だったのなら答えは簡単だったろう、それは子孫を残す為だ。本来なら人間も動物なのだから子孫を残す為という答えがすぐに浮かぶはずなのだが…今の人間を見るとそんな答えは出てこない。私が生きている理由ってなんなのだろう。私は何故、生きているのだろうか……

私とその質問をされたのは、いつものように代わり映えのしない毎日の中で、ある日のことだ。

その日、高校生の私は学校に行き、約10時間を学校ですごし、長い長い学生としての1日を終え、帰宅していて、帰宅路の途中の橋を渡っていた。そこに彼は突然、現れた。彼は黒いマントで全身を覆っていた。そして、片手には大きな鎌を持っていた。正直、見た瞬間、「死神のコスプレ…なんでこんなところで…」とか思ったりした。いや、おそらく、死神のコスプレ…あたりまで口に出してしまっていただろう。あまりにも突然でインパクトが強すぎて驚くの

も忘れてしまっていた…。いや、普通は驚くっていうことは忘れたりするものではなくて自然とそうなるものなんだろうけど…。彼と私は向かい合ったまま、しばらく相手を観察し合った。彼が私を観察していたかは定かではないが少なくとも私は彼を観察した。観察していて、ふと彼の顔を見た時に目が合った。すると、彼は現れた時のように突然話し始めた。

「はじめまして、中川八重さん、突然ですが僕は死神です。あなたに運命の質問をしに来ました。その質問にあなたが答え、それが僕の納得する答えなら、あなたには生きている価値があるとして僕はあなたに手を出しません。しかし、もし納得できる答えでなかった場合は、あなたの魂をいただきます」

聞いた時は、頭が働かず呆然と「この人、何を言っているの」と言わんばかりの顔で彼を見ていたのだが、しばらくしてツツコミどころ満載の彼に向かって返事をした。

「意味がわからない…。コスプレしてキャラになりきるのは君の自由だけど、そんな悪ふざけが過ぎた質問をいきなり名乗りもせずに初対面の私に向かってするのは失礼じゃないかな…」

すると彼は、おもむろに鎌を橋の上一面に敷き詰められたアスファルトを力強く突き破って咲いていただろうタンポポに近づけた。するとタンポポは枯れた…。ありえないだろう…。今まで花びらを黄色に染めて綺麗にそして、かわいらしく咲いていたタンポポが目の前で一瞬で枯れた。言葉が出ずに口をポカーンと馬鹿みたいに開いて枯れたタンポポを見つめる私、そんな私を無視して話し始める「死神」の彼。

「えーっと、失礼しました。僕の名前は夜鬼^{よき}、正真正銘、本物の死神ですよ。…。あの…。聞いてますか？」

「あッ！は、はい！うん！聞いてるよ！」

「…まあ、いいです。先程話したようにあなたに質問します。それに答えてください。では、質問です。」「ちょ…。ちょっと待ってよ！なんで私がその質問とやらに答えないといけないの？ていうか、

魂をもらうつてなんなの!？」

「ん…あなたが質問に答えないといけない理由は僕…死神に質問をされたからです。答えない場合、魂をいただきます。魂をいただくというのは簡単に言えばあなたが死ぬ、ということです。わかりましたか？」

「わかるか！なんで私が選ばれたのよ!？」

「たまたま、僕の目についたからです。死神っていうのはそういうものなんですね。割りとテキストです。まあ、僕に選ばれたからには、あなたが死なずにすむ方法はただ1つ、質問に答えて僕を納得させることです。」

もはや抗議の言葉も思いつかず、私は彼の言うことを黙って聞くことになった。

「では、質問です。」「あなたは何故、生きているのですか？」質問の答えを出すまでの期間は1ヶ月。その間、さすがに制限はありませんが過去への行き来を自由にできるようになります。過去に行きたい時や質問がある時はこの笛を吹いてください。」

彼はそう言って首から下げていた笛を私に手渡した。彼の話の意味がわからず圧倒されて黙って笛を受け取る私…

「では、いい答えを期待しています。頑張ってくださいね。」

そっというと彼は姿を消した…本当に目の前から一瞬で消えた。

「…え?」こうして、私の生きている理由探しの物語は始まった…。

第1話（後書き）

ここまで読んでくださり、有り難うございました。正直、かなり読み辛かったと思います。すみませんでした。精進します。

第2話（前書き）

この物語はフィクションです。

第2話

物語というものはどうやら突然やってくるものらしい。そして、それは主人公となる人が望んでも望まなくても勝手に始まって、主人公は無理にでもその物語を進めなければいけないみたいだ…。

私はあの死神と名乗る…いや、先程自身の目の前で起こったことを考えると「名乗る」ではなく「死神」と断定してしまった方がいいのかも知れない。まあ、死神ではなくて他の妖怪だの悪魔だのそんな類のものかもしれないが、とにかく「人間ではない」「少年、夜鬼が姿を消した後、私は今起こったことをまとめようと思い、死神と話していた橋を渡って、近くの河原に行った。

河原には人はいなかったから、落ち着いて考えることができた。でも、この考えをまとめた後に帰宅中だったはずなのに何故か学校に行ってしまったのを考えると落ち着いていなかったのかも知れない。まあ、あんな出来事の後だから仕方ないだろう。決して私のもとと天然ボケだったりするわけでは無いということを理解して欲しい。（正直に言えば、過去にも帰宅中にコンビニに寄った後、学校に行ってしまったこともあるのだが…。）

河原で私が先程の出来事をまとめた結果だが、いや、まとめを試みた結果だが、案の定、全くわからず考えれば考える程混乱した。

「帰ろう…。」そう言っただけで私は河原を後にした。この後、学校に行ってしまったのだが、それはもう忘れよう。…あれ？忘れていいのだろうか。忘れたらまた繰り返し替えるのではないか？…心の底にしまっておこう。

私は、一人暮らしだ。住んでいる所は親戚のおばさんが経営しているアパート。家賃は払っていない。太っ腹なおばさんだ。体型も太っ腹だし。おっと、太っ腹で太っ腹な優しいおばさんが気にしていることは言うべきではないか。

一人暮らしをしている理由は、私が高校に入学してすぐに父が転勤することになり、私が引越したくないと言うと基本的に放任主義の…むしろ放置主義の両親は「じゃあ、一人暮らししなさい」と笑顔で言った。まあ、その後、とんとん拍子に話は進み私は一人暮らしをすることになった。

日頃から家事は私の仕事だったので特に困ったことはなかった。むしろ、困ったのは両親だろう。母は家事が苦手だった。特に料理は凄かった。母はインスタントラーメンを作ることすらもできないのだから…。そんな母がもし今、料理をしているとすれば…父よ、頑張れ。

さて、家に着いたのだけど…どうしよう。期間は1ヶ月で、「生きていく意味」を探す。

「確か、わからないこととか過去に行きたいときは笛を吹けばいいんだよね…」

私は夜鬼から受け取った笛をポケットから取り出し、恐る恐る吹いた。

(ぴ…ぴい…)

すると、突然笛が光り出した。眩しくて目をつぶる。

「お呼びですか？お嬢さん」

…なんか声が聞こえた…。ゆっくりと目を開ける私。目の前にスーツを着たスマートな兔がいるのを見つける私。一瞬間を置き叫ぶ私
「…なッ…キャツきやあああ？えええ！？」

第2話（後書き）

お読みいただき有り難うございました。

第3話

小さい頃には、お伽話みたいにヌイグルミや動物が動いたり、喋ったりできればいい、そんなことを思っていた。成長するにつれ、そんな事を思うのは恥ずかしい事だという周囲の目に流され、いつの間にかそんな思いは私の中から消えていた、忘れてしまっていた。

でも、私はそんな思いを思い出した。思い出さずにはいらなかった。なぜならば先程、死神の夜鬼から受け取った笛を吹いたところ直立しているタキシード姿のスマートな兎が現れたうえにソイツが喋るという異常な事が起こったからだ。

まあ、初めは驚いたけども落ち着いたところで奇妙な兎との会話を試みようというところなのだ。

「やっと落ち着きましたね。お嬢さん。改めましてコンバンワ。私の名前はエル。お嬢さんは私のことを兎呼ばわりしていますが、私はインプです。お嬢さん、お名前は？」

「八重、中川八重……」

ニツコリとして会話を進める兎…エル。

「八重さん。いい名前ですね。おしとやかそうで。まあ、先程のあなたの驚き方を見るとおしとやかとは…言いにくいですが。」

「なッ！？それはあんたがいきなりできてきて喋ったりするからですよー！」

「いきなり出てきてって、お嬢さんが笛を吹いたから出てきたんですがね。ああ、そうだ。忘れるところでした。いや、正確には忘れてました。思いだしましたよ。私達インプの仕事は死神達の手伝いなんです。手伝う内容は、笛を渡された人間がそれを吹いたときに出てきて、その人間の質問に答えたり、過去に連れて行ったりすることです。お嬢さんの用事はなんですか？」

「え…」

とりあえず吹いただけなのだがどうしよう…正直に言うべきか質問を今考えるか…質問を考えよう。

2分経過

「もしもし、お嬢さん？用事はなんでしょうか」

「え…っと、じゃあ、生きている理由って何？」

「あ…あははは！お嬢さん、その質問は無意味ですよ。それは一人違うものでしょう。私の理由を知ったところでどうにもなりません。それに他人の理由を死神に言ったところで納得してもらえないことは無いと思いますがね」

「……。」

この兎、なんか嫌いだな。とりあえず、消えてくれないかな…。

「わかった。わかったからまた用事できたら呼ぶから消えてくれないかな？」

なんだか驚いた表情をする兎。

「あれ、死神から聞いてませんか？私達インプは呼び出した人間が死ぬか死神を納得させるかしない限りこの世界から戻れないんですか…」

ああ…なんだか突然頭が痛くなってきた…。

最終話（前書き）

この物語はフィクションです。

最終話

私が好きになった物語は後半で急転換を向かえアッサリと終わってしまうものが多い。

時間の経つ早さというものは感じるものが活発に活動するほど遅く感じ、何もせずにいるものほど早く感じるらしい。そんなわけでぐうたらな生活していた私の時間が経つ速度はジェット機のように早く、死神に与えられた1ヶ月間も終わり約束の時間まで、あと1時間になった。30日間が何もしないままに過ぎてしまった。例の兎との生活も何事もなく過ぎた（まあ、毎回のように私の入浴を覗く兎との格闘を無視した場合ではあるが…）。

過去には1度行ってみたのだが、死神が軽く「制限はあるもの」って言うていた制限が「3日前までにしか戻れない」と…もう、全く無意味なタイムスリップにしかないのだ…。案の定、私はその能力で3日前に戻ってみただけ何も見つけれなかった。

ところで、私は気分転換にと散歩している途中なのだが先程、気になる人を見つけて、その人を見物している。中年の黒い背広のおじさん。私が死神と出会った橋の上にいるおじさん。橋の手摺りを乗り越えようとするおじさん。走り出す私、おじさんを大声で呼び止める私。

「ちよつと！何してるんですか！」

驚いて振り返るおじさん。「えっ…」
ドスンッ

乗り越えようとした手摺りから橋の方にダサく背中から落ちたおじさん。

「いたた…」

「大丈夫ですか？」

「ああ…すまなかった」

「いや、別に。なんであんなことを？」

「…今朝、妻と娘が死んだんだ。だから、自分も…と思ってね」

「…」

「…」

沈黙…気まずい…

「ど…どうして死んでしまったんですか？」

「交通事故だよ…自宅を出てすぐの交差点で信号無視の車にはねられたんだ…それで会社に電話かかってきて…僕が病院に着いた時にはもう…」

「住所は…？住所はどこですか？その交差点ってどこですか？」

「え？」

私の物語は最後にやってきたようだ…

私はその日の朝にやってきた。よくいろんな漫画やアニメでは過去は変えてはいけないことになっているけど、そんなことは知ったことではない。本当にいけないのなら神様は私にこんなチャンスを与えないだろう。まあ、神は神でも死神なんだけど…神に違いはないだろう。

そんなことを考えているとおじさんに聞いた住所に着いた。約5分後にあの家から出てくるおじさんのお嫁さんと娘さんをちよつと足止めすればいいんだ。

5分後

ガチャッ

家のドアが開いた。出てくるお嫁さんと娘さん。走り出す私。

ズサーッ

2人を足止めに行こうとして走ったが2人の前で激しく転んでしまった…痛い。

「大丈夫？」

娘さんが心配してくれる。
立ち上がる私。

「だ…大丈夫！ありがとうね。心配してくれて」

痛さを我慢して笑顔で答える私。しかし、本気で痛いから多分笑顔がひきつつてるだろう…。

「じゃ、じゃーね！車に気をつけてね！」

走って逃げる私。結果的に時間稼ぎできたし…これでいいだろう。

少しした所…あの橋の上まで言った所でずっとそばにいて私にしか見えないからと言って私が転んだのを見て爆笑しやがった兎が話しかけてきた

「お嬢さん、そろそろ時間ですよ。転んでいる場合ではありません。あなたで30日間でちゃんと答えを出せたのかは知りませんがそろそろ現実時間に戻りますよ」

最後まで腹の立つ兎だ。

「わかった。帰ろう。」

「では。」

兎が指をパチンと鳴らす。辺りが急に朝から夕方の色に変わる。元の時間に戻ってきた。

「あと3分で時間です。せいぜい最後の時間を楽しんでください。

まあ、納得させれば最後ではないですが…」

私は無言でうなずく。

そして、橋の手摺りに手をかけて遠くに見える景色を眺める。キレイだな…。

「今日の朝ねー家の前で知らないお姉ちゃんが転んだんだよ」
背後からそんな声が聞こえて振り返る。あのおじさんとお嫁さん、娘さんが幸せそうに並んで歩いて行く。

事故は起きなかったようだ。事故が起きなかったということは私とおじさんは出会わなかったことになるのだろう。でも、出会わなか

「つたらお嫁さんと娘さんは死んでいたはずなのに…。でも、そんな矛盾はどうでもいい。あの幸せな家族は今、存在するんだから。ふと、不思議に死神の質問への解答が頭に浮かんだ」

「あなたの生きている理由はなんですか？」

隣にはいつの間にか夜鬼がいた。向かい合う夜鬼と私。1呼吸して私は答える。

「私が生きている理由を探すためかな」

見つめ合う夜鬼と私。

笑みをもらす夜鬼。

「解りました。うん、ありがとうございました。ではお元気で。また、機会があればお会いしましょう。」

「どうやら合格のようだ。しかし、

「死神になんてもう会いたくないね」

「フフフ…そうですね。さようなら」

また出会った時のように一瞬で姿を消す夜鬼。

「では、さようなら。お嬢さん。30日間、わりと楽しいものでしたよ」

続けて姿を消す兎。

明日からどんな生活が始まるのだろうか…。いや、多分、いままでと何も変わらない生活がまた始まるんだろう。でも、私の心だけは変わっていく。

「生きている理由を探すために。」

私は家に帰ろうとしたのにまた、学校に向かってしまった。認めようじゃないか。私は天然ボケだと。

そして、死神の彼は明日もどこかで誰かに問い掛けているかもしれない。

「あなたは何故、生きているんですか？」と。

最終話（後書き）

最後までお付き合いいたさりありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8568b/>

Reason of Life

2011年10月3日18時59分発行